



# 北中だより

学校教育目標「自ら考え なかまと磨き合う 北中」

菊池北中学校  
学校だより No4  
文責 芹川博文  
5月2日(金)

## 「どうだった!?!」から生まれる「温かい空気」 ～ 2年生 「3連休明けの試合結果」の話の中から ～

3連休明けの学校は、静かな霧雨の朝となりました。2年生の教室横を通ると、担任の東先生が、朝の会で連休中の部活の試合結果等を尋ねているところでした。「〇〇部、どうだった?」の問いに、それぞれの部の生徒が答えていきます。東先生は部活動以外の弓道や陸上の結果も尋ねられます。北中の部活動であるなしに関係なく、互いが頑張っていることを全員で共有し合う「温かい空気」を感じました。

陸上大会に出場したY君が1500mの標準記録を突破したことが分ると、「お～」という声と共に自然と拍手が起こりました。「標準記録は?」「4分45秒です。」「で、どうだったの」「5秒早く走りました」「そう言えば体育の時に靴にこだわってたよね。」などの言葉のキャッチボールは続きます。

連休中もそれぞれの「ドラマ」があり、嬉しさや悔しさなどを経験しての登校。その出来事や思いを共有する学級の温かさを感じた朝でした。



## 「やらずにできないじゃなくて、まずは目指す」

～ “走る詩人” 田中希実 (陸上競技選手) の言葉 「きみを変える50の名言」より ～

図書室から借りた本「きみを変える50の名言」の中の一つを紹介(要約)させていただきます。

\*\*\*\*\*

2021年の東京オリンピックの陸上女子1500mで日本人として93年ぶりの決勝進出を果たした田中希実さんは、その時の想いを「中学校三年生の時以来、人生二度目の気持ちに出会った」と語りました。中学時代に全国大会で優勝したレースは、彼女のベストレースで「あの時は、最初から最後まで気迫をまとい、やる気の塊のようだった」と、当時をふりかえります。オリンピックで決勝進出を決めた時のメンタルも同じだったようで、「今後、いつ、巡り会えるか。気持ちや状況は一期一会なので」と、インタビューに答えました。

田中さんは「走る詩人」と言われます。趣味は読書で、小学生の時の夢は「作家」だったそうです。

\*\*\*\*\*

田中選手が「中学三年の時以来」と語っているように、大人になっても鮮明に残る記憶があります。

私は中高と柔道をしました。決して強くはありませんでしたが、今でも残っている「瞬間の記憶」があります。抑え込まれて身動きが取れないまま聞く終了ブザーの音。自分より大きな相手に勝った時の爽快感。試合会場に入った時の緊張感。どんなに勝てなくても家に帰ると「よか、よか」と言ってくれた父親の言葉……。記憶に残っていない膨大な出来事も含めて、それらの経験が大人になってからの土台となることでしょう。明日からの4連休、生徒たちにとって「一生残る記憶」の瞬間があるかもしれません。



## ちょこっとフォト

1年生 集団宿泊教室の朝、集合した後の靴並びの美しさに思わずパチリ。水俣学習と共に、芦北の海でのペーロン体験、そして宿泊。出発の朝の思いが伝わるような靴の並び方でした。

## 出発の朝の靴たち



体育大会の団決めのくじを引いている様子。全校生徒が給食を食べながら見守りました。4連休後からいよいよ練習開始です。

## 「運命」のひも

